

について

小嶋祥三

日本動物心理学会第37回大会(1977)

3) サルの大脳半球の優位性に関する予備的実験

室伏靖子

日本動物心理学会第37回大会(1977)

4) Spreading Depression を用いたラットの摂水行動

松澤哲郎

日本動物心理学会第37回大会(1977)

5) 行動と認知—行動主義の立場から—

浅野俊夫

異常行動研究会シンポジウム(1977)

6) ハトにおける選択行動

浅野俊夫

日本動物心理学会例会(1977)

社会研究部門

川村俊蔵・河合雅雄

東 滋・鈴木 晃

森 梅代¹⁾・足澤貞成²⁾

研究概要

1) ニホンザルの分布とその変動に関する研究

川村俊蔵・東 滋

鈴木 晃・足澤貞成

京都、兵庫、滋賀、和歌山、三重、岐阜、宮崎、東北地方の南部のニホンザルの分布の現状について、一次資料の集積をおこなっている。

2) ニホンザルの社会生態学、とくに自然群の環境利用とグルーピング・社会構造

東 滋・足澤貞成

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れがしめす生活と社会現象をとらえなおすために屋久島と下北半島西部の地域個体群について継続的な調査を行なっている。

3) ニホンザルの個体群の生活の維持に対する森林施業その他の human impact の影響の生態学的研究

東 滋

ニホンザル個体群の地域構造や生活のたてかたに与える人為営力の作用を生態学の文脈においてとらえる。もっぱら“自然”の側の反応を、異なる形式あるいは程度で人為の加わった地域間の比較と同一地域の時系列的変化の追跡により把握しようとする。下北半島の北西部・南西部の2つの地域個体群についての個体群変動の追跡と岐阜県下の天然林地帯と“森林開発”のすすんだ地域

の予備的調査を行なった。

また平行して、おなじ環境変化がニホンザル以外の森林哺乳動物に与える影響についても調査をすすめている。

4) ニホンザルの地域個体群のあり方

鈴木 晃

上信越地方を中心として、ニホンザルの地域個体群の土地利用、個体群動態、遊動におけるスペーシングの問題、オスの群れの離脱等に関する社会関係等の調査およびとりまとめを行なってきた。

5) ニホンザルコドモの社会関係の発達

森 梅代

あそび仲間関係、社会関係の発達における性差および性的成熟と遊び行動の関連、母子関係に関する研究を行なっている。

6) 東アフリカにおける各種霊長類の社会学・生態学的研究

鈴木 晃

特別事業による海外調査を1977年8月から一年間、ザイール、ケニヤを中心に行なっている。

7) インドネシアにおけるヤセザル類の比較社会学的研究

川村俊蔵・渡辺邦夫¹⁾

昭和49年度に始まるインドネシアにおけるヤセザル類の比較社会学的研究は、この年(第3次)を以って一応の終止符を打った。川村は前年に引きつづき、スマトラの主としてサンピル山調査区において、*Presbytis melalophos* の研究を行ない、群れが典型的な単雄群であり、オスグループが存在し、これまでもっともよく研究された *P. entellus* と基本的に同型であるが、細部に相違があり、行動上かなり進歩した種であることを確かめた。メンタウエイ産の種を担当する渡辺は49年来の主研究対象である *Simias concolor* について、ペア型と考えられた従来の考えを打ち破って、より本来的な条件下では、この原始的な種もやはり単雄群型であることをつきとめた。同時に観察した *P. potenziani* については、ペア型がどの地域でも一般的であるという結果をえた日本側と共同研究を行なうインドネシア側の2人の研究者も、ジャワにおいて、それぞれ *P. cristatus*, *P. aygula* を観察し、その結果も基本的に単雄群型を認めざるをえないものであった。

8) ヒヒ類の比較社会学的研究

河合雅雄

ゲラダヒヒ、マントヒヒ、マンドリル、サバナヒヒについて、生態と社会構造の関連についての比較考察を行なった。

9) ゲラダヒヒの生物社会学的研究

森 梅代

1) 教務職員 2) 教務補佐員

1) 大学院学生

エチオピア高地で行なったゲラダヒヒの野外調査での資料をもとにヒヒ類の比較社会学的研究を行なっている。

10) 霊長類の生殖期と適応に関する研究

河合雅雄

霊長類の生殖行動（交尾と出産）の季節性について、環境要因との関連を総合的に検討し適応の問題を考察した。

総 説

- 1) 河合雅雄 (1978) : 性の進化的意義とヒト化の問題。生物科学, 30, 1-2.
- 2) 河合雅雄 ((1977) : 霊長類の行動特性と人類進化。創造の世界, 24.
- 3) 東 滋 (1977) : サルの世界 (1)~(5). 地理, 31, 32.
- 4) 鈴木 晃 (1977) : 雑食化への道—野生 チンパンジーの生態。pp 243, 玉川選書 53, 玉川大学出版部。

論 文

- 1) 河合雅雄 (1977) : アヌビスヒヒとマントヒヒの種間雑種化に関する社会過程。昭和50年度海外学術調査報告書, 21-25.
- 2) 鈴木 晃 (1978) : 霊長類の社会構造における性。生物科学, 30, 29-34.
- 3) 森明雄, 森梅代, 岩本俊孝 (1977) : 幸島の野生ニホンザルの群れにおけるメスの間の順位変動について。形質・進化・霊長類, 今西銘司博士古稀記念論文集 (加藤泰安, 中尾佐助, 梅棹忠夫編) pp311-334, 中央公論社。
- 4) 森 梅代 (1977) : ゲラダヒヒの社会構造。昭和50年度海外学術調査報告書, 75-80.

学 会 発 表

- 1) The variation and adaptation of social groups of chimpanzees and Abyssinian colobus monkeys in Uganda and Tanzania. Akira Suzuki Burg Wartenstein Symposium No. 75, "Ecological Influences on Social Organization: Evolution and Adaptation" (1977).
- 2) スマトラにおける *Presbytis melalophos* の社会生活 川村俊蔵 第22回プリマーテス研究会 (1978)

変異研究部門

野澤 謙・和田一雄
庄武孝義・峰澤 満

研 究 活 動

1) ニホンザルの集団遺伝学的研究

野澤 謙・庄武孝義

ニホンザルの血液蛋白の構造を支配する遺伝子の変異を電気泳動法によって検索し、群内、群間の変異性を定量化する。昨年度までにニホンザル約40群、総個体数約1,800頭の血液試料について、27種の蛋白の構造を支配する計30遺伝子座の検索をおこなった。このデータをもとにして、統計的検討を加え、繁殖単位間の毎代の移出入率、遺伝的変異の散布範囲などについて定量的推定をおこない、ニホンザルの繁殖構造を解明すべく作業を続行中である。これまでの結果をプリマーテス研究会にて発表した。

2) Macaca 属サルの系統的相互関係

野澤 謙・庄武孝義

ニホンザルを含む *Macaca* 属サル各種から採血をおこない、上記 1) と同一の方法によって種内、種間の遺伝的変異性を定量化し、それら種間の遺伝子構成上の差を遺伝距離で表現し、それに数量分類学的手法を適用して枝分れ図を描く。それにより種間の近縁関係、分化時間の推定等をおこなう作業を目下続行中である。今年度は新たにアッサムモンキーの資料を入手し、これとアカゲザル、ボンネットモンキーとの関係を調査し、プリマーテス研究会にて発表した。

3) ニホンザルの先天的四肢奇型への遺伝学的アプローチ

野澤 謙・庄武孝義

ニホンザルの数多くの餌付け群に多発する先天的四肢奇型が遺伝的支配を受けているか否かを明らかにすべく研究が続行されている。集団の奇型出現の家族集積性のデータから統計遺伝学的手法を用いて遺伝率の推定をおこなう他、淡路島野猿公園の協力を得て、交配実験をおこなっている。さらに今年度はモンキーセンターとの共同研究として、宮島から奇形サルを入れ本研究所内で交配実験を開始した。

4) 家畜化現象と家畜系統史の研究

野澤 謙・庄武孝義

在来諸家畜とそれらの野生原種の遺伝学的野外調査によって、家畜化現象そのものの集団遺伝学的解明と、個々の家畜種内で地域集団間の遺伝的分化の程度、系統的相互関係の解明をおこないつつある。

5) ヒヒ類の種分化に関する遺伝学的研究

庄武孝義・野澤 謙

1975年度の調査に続いて 1977 年度にゲラダヒヒとアヌビスヒヒの調査をおこなう予定であったが、現地の政情不安定のため延期になった。1978年度から1979年度に